

その後のバル判事と日本……161

第七章 バングラデシュ小史／167

イギリス植民地のもとのベンガル分割……168

インドからの分離とバングラデシュ独立……170

独立後も安定しない政局……177

シェイク・ハシナ政権がもたらした政治・経済的安定……180

特別対談 ペマ・ギャルポ×シャーカ／183

バングラデシュ独立とチベット人……184

日本によるバングラデシュ支援……188

誇り高きベンガル人……193

岡倉天心とタゴールが交流した意義……198

「アジア主義」は正しかった……204

渋沢栄一とタゴール……206

ガンデーとネルーが見たチャンドラ・ボース……210

日印の文化交流がインド独立に結びついた……215

おわりに……221

主要参考文献……228



第一章 日本とベンガルの交流のはじまり

近代初期の交流

日本とインドの関係は、一般的に六世紀半ばの仏教公伝からはじまるとされている。その後、七五二年には、奈良の東大寺で行われた大仏開眼法要で、南インド出身の菩提僊那僧正が中国から招かれて導師を務めた。菩提僊那は法要後もそのまま留まり、日本で遷化（高僧が亡くなること）された。

その後しばらく、日本とインドとの交流は直接的には途絶えたが、江戸から明治時代にかけては、オランダとの貿易でベンガルの生糸や綿織物、ベンガラ色の顔料やインド藍などが輸入された。ベンガラ色の顔料は古くから使われてきた無機顔料で、ベンガルで良質なものが産出されたことが、「ベンガラ（弁柄、紅殻）」という名前の由来であるといわれている。経年劣化しにくく、体に優しい、そして価格が安いというメリットがあり、現在でも京都で見られる紅殻格子や岡山県高梁市の吹屋の街並みがベンガラの顔料を使っていることで有名である。

また当時、藍はすでに日本で生産されており、藍染は庶民にまで普及して、衣服をはじめさまざまな用途に使われていたが、東ベンガル産のインド藍は成分の純度が圧倒的に高く、簡単に染まるため生産効率が高いということで、明治時代に輸入されるようになった。明治から大正時代にかけては、ヨーロッパで高く評価された東ベンガル製の「モスリン」織物も日本でも人気となった。その後、モスリンは東京浅草などの工場で製造されるようになり、「東京モスリン」というブランドになった。こうしたベンガルからの輸入品が日本の産業に打撃を与えたこともあるが、これらは日本の生活の一部として定着していった。当時のベンガルはインドの肥沃な穀倉地帯と呼ばれ、さまざまな生産品の原料をもたらす自然の恵みを受けた豊かな大地であった。そのため、一七世紀以降はベンガルの利権を求めて、ポルトガル人、オランダ人、フランス人がベンガルの地で争った。だが、一七五七年のプラッシーの戦いでイギリス東インド会社がフランス・ベンガル太守連合軍を破り、イギリス東インド会社はベンガル地方の支配権を確立した。

この戦争の後、イギリス人に対する最初の抵抗運動（一七六三年）が起こったのは、東ベンガルのダッカであった。当時東ベンガル産のモスリンがヨーロッパで高く評価され多量に輸出されたため、イギリス国内の綿工業は打撃を受けた。イギリス人が自国の綿工業

を保護するため、ダッカのモスリン織工を抑圧したことに対する抵抗であった。

後に、イギリスに対する抵抗運動はベンガルを含むインドのいくつかの地域でも行われるようになり、一八五七年にはイギリス東インド会社に反抗して大反乱が勃発した。当時イギリスの保護下にあったムガル帝国の皇帝・バハードウル・シャー二世はこの反乱の最高指導者に祭り上げられたが、翌年に鎮圧。皇帝が国外に追放されたことにより、ムガル帝国は滅亡した。インドを実質的に植民地支配していたイギリス東インド会社は、その権利をイギリス国王に委譲し、結果、イギリスはインド全土に対する植民地支配を確立した。

西ベンガルのカルカッタはイギリスの植民地政策で第二の「ロンドン」としてインドの首都に定められ、その後の英領インドにおける政治、経済、文化、芸術、教育、思想などの中心地となっていた。このような歴史的背景から、当時のベンガルはインドの近代化をリードし、独立運動における思想的な基盤が形成される地域であった。

その後、ベンガル民族の政治的、精神的独立を求めて立ち上がりつつあったインドの志士たちとの間で、日印関係は輝かしく復活することになる。冒頭で述べたヴィヴェーカーナンド、タゴール、ビハリ・ボースとチャンドラ・ボース、そして東京裁判において被告

全員の無罪を主張した唯一の人であるパル判事らがみなベンガル人であったことには、以上のような理由があった。

そのころ日本では、一八五三年に黒船が来航し、不平等条約を強いられるなか、欧米列強からの独立を維持するために奮闘していた。そして、わずか一五年間で明治維新を成し遂げ、江戸幕府から明治政府へと日本の国体は大きく変わっていった。

一八五八年からインドはすでに英領インドとなっていたが、首都カルカッタには数多くの有名人を世に出したタゴール家という名門の一族がいた。彼らは西洋の教育を受け、インド社会に政治的、経済的な影響力があり、文化にも精通していた。近代において、日本とベンガルの最初の交流は、確認できる限りでは、このタゴール家から始まる。

当時、タゴール一族は財産分配の問題で分裂し、カルカッタ市内のジョラシャンコとパトゥリヤガタという土地に分かれて住んでいた。パトゥリヤガタのタゴール家には、ラジャ・シヨウリンドロモホン・タゴールがいた。彼は音楽研究家として有名で、インドやヨーロッパ各国で高く評価され、その名は日本にも知られるようになった。彼の音楽に対する興味をお知りになった明治天皇は、日本の太鼓を含む一二種類の楽器を贈られたとい



スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

ヴィヴェーカーナンダ（本名・ノレンドロナト・ドット）は、一八六三年にカルカッタで生まれた。師ラーマクリシュナの教えを引き継ぎ、ヒンドゥー教の改革を通じて新しい宗教思想を確立し、西ベンガル地方における文化復興やインドのナショナリズム運動にも力を尽くした偉大な宗教家であり、西欧にインド哲学やヨーガを紹介して東西の文明や信仰の融合・調和をめざした。

一八九三年、ヴィヴェーカーナンダはアメリカのシカゴで開催された万国博覧会の万国宗教会議に招かれ、アメリカへ向かう航路で彼を乗せた汽船は給油のため日本に寄港した。

そのとき、彼は滞在した横浜のオリエンタルホテルからマドラスの友人アラシニング・ペルマルとそ
のほかの友人に宛て、はじめての日本で感じた印象を手紙に書いている。

単にマッチ工場を見る限りでは、日本人は自国に必要なものをすべて作ることに心を傾けていま

う。シヨウリンドロモホン・タゴールもそのお礼として、インドのヴィーナを含む三種類の楽器を明治天皇に献上した。それは一八七七年から一八七八年ころの出来事であり、音楽楽器から始まった交流であった。その後、明治天皇からインドに贈られた日本の楽器は、シヨウリンドロモホン・タゴール自身が建てたカルカッタの音楽資料館に置かれていた。また、インドから贈られた楽器も皇居で保管されていたが、後に日本の帝国博物館に移され、長年展示されていたといわれている。

日本とベンガルの交流の歴史は、このタゴール家なしに語ることはできない。あとで詳しく述べるが、分裂したもう一方のジョラシャンコのタゴール家には、アジアではじめてノーベル文学賞を受賞した詩聖ラビンドラナート・タゴールがいる。そしてもう一人、タゴール一族ではないが、近代初期の日本とベンガルの交流において重要な人物がいる。それは、ベンガルの宗教家スワミー・ヴィヴェーカーナンダである。

ヴィヴェーカーナンダと日本

す。中国―日本間を航行する日本の汽船もあり、まもなくボンベイ―横浜間を航行する予定です。

たくさんのお寺を見ました。どの寺院にも古いベンガル文字で書かれたサンスクリット語のマントラがいくつもあります。知的な宗派のわずかな僧侶だけがサンスクリット語を知っています。現代の進歩に対する熱狂は、僧職者にさえ浸透しました。日本人について頭に浮かんだことを一通の短い手紙では書き表せません。ただ、私は一つだけ、毎年、インドの若者が日本と中国を訪問することを望んでいます。特に日本人にとってインドは、いまだにすべてが高尚ですばらしい夢の国です。

『THE COMPLETE WORKS OF SWAMI VVEKANANDA VOL V』 ADVAITA ASHRAM (1964)

この手紙からわかるように、日本人のモノづくりの精神や、インドから伝わったマントラを継承していたことが、ヴィヴェーカーナンダにとって印象的だったようだ。また当時の日本人はインドに対する憧憬の念をもっていたことがうかがわれる。

その後、ヴィヴェーカーナンダはシカゴに向かい、万国宗教会議における演説を行った。安倍元首相が演説のなかで引用したヴィヴェーカーナンダの言葉は、どちらもこの万国宗教会議で語られたメッセージであり、聴衆に深い感動を与え、マスコミを通じて世界で評価された。

The different streams, having their sources in different places, all mingle their water in the sea.

源を異にするさまざまの河川が、すべて海に流れ込んで一つになるように、おおまよ、人びとがさまざまの傾向に応じてたどるさまざまの道は、曲がったりまっすぐであつたりさまざまに見えるではありませんが、すべてあなたのもとに達します。

"Help and not Fight", "Assimilation and not Destruction", "Harmony and Peace and not Dissension".

宗教統一の共通地盤について多くのことが話されました。私は今ここであえて自説

を述べるようなことは致しません。しかし、もしここにおいでの方で誰であれ、この統一は諸宗教の中のどれか一つが勝利し、他が滅亡することによって得られるであろう、と期待なさるなら、その人に向かって私は申しましょう、「兄弟よ、あなたのは、かなう見込みのない希望です」と。私がキリスト教徒をヒンドウ教徒にしたいと思いません。とんでもないことです。私がヒンドウ教徒か仏教徒をキリスト教徒にしたいと思いません。とんでもないことです。

種子は大地にまかれ、土と空気と水がそれを育てます。その種子が土か空気か水になりますか。いや。それは一本の植物になります。それ自らの成長の法則に従って発育します。空気、土、および水をとりいれてそれらを植物の實質に変え、植物として成長するのです。

宗教の場合も同じです。キリスト教徒がヒンドウ教徒や仏教徒になるべきではなく、ヒンドウ教徒や仏教徒がキリスト教徒になるべきでもありません。ただ各自が他者の精神を消化吸収しつつ、しかも自己の個性を保ち、彼自らの成長の法則に従って進歩すべきであります。もし宗教会議が世界に何かを示したとすれば、それはこれです。

会議は、聖らかさ、純粹さ、および慈悲は世界のいかなる教会の専有物でもないということ、およびあらゆる宗教体系が最も高貴な人格の男女を輩出している、ということとを世界に向かって証明しました。この証拠を前にしてもし誰かが、自分の宗教だけが生き残って他が減びることを夢見るなら、私は心から彼をあわれみます。そして彼に向かって、いくら逆らっても、まもなくあらゆる宗教の旗じるしに、「助けよ、そして戦うな」、「破壊ではなく同化」、「紛争ではなく調和と平安」と書かれるであろう、と指摘いたしましょう。

スワームイー・ヴィヴェーカーナンダ『シカゴ講演集』日本ヴェーダーンタ協会

たった一度の短期滞在であったにもかかわらず、ヴィヴェーカーナンダは日本を興味深く観察し理解した。その後、日本に対するさまざまなインタビューやコメントを残しているが、なかでも特に印象的なこのインタビューを簡単に紹介したい。

Q…あなたは日本で何をみましたか？　そして日本の進歩的な段階に、インドが続

いていける可能性はありますか？

——インドの三億の人々すべてが、国全体として合わせていくほかは何もありません。世界は日本人ほど愛国的で芸術的な民族を見たことがありません。一般的に芸術は汚れがつきものですが、日本人の芸術は、芸術に完全な清潔さがあります。私はインドの若者が、彼らの人生で一度は日本を訪れてほしいと願います。日本に行くことは、とても簡単です。日本人はヒンドゥー教がすばらしく、インドは聖地だと信じています。日本の仏教はセイロン（現スリランカ）の仏教とは、まったく異なります。日本の仏教はヴェダンタと同じです。それは肯定的で理論的な仏教であり、セイロンの否定的な無神論的仏教ではありません。

Q…日本の突然のすごさの鍵は何ですか？

——日本人自身の信仰、そして彼らの国に対する愛国心です。自国のためにすべてを犠牲にする準備ができる人が現れるとき、誠実にそのような背景があれば、インドはあらゆる面で素晴らしくなります。国を作っているのは人です！その国には何があ

りますか？もし日本人の社会的道徳や政治的道徳をつかむことができれば、インド人も日本人と同じくらい素晴らしい人になるでしょう。日本人は自国のためにすべてを犠牲にする準備ができていたので、彼らは素晴らしい人になりました。しかし、インド人はそうではありませんし、そうなることもできません。インド人はただ自分の家族や所有物のためだけに、すべてを犠牲にします。

——一九九七年二月マドラスの「The Hindu」紙のインタビューより一部抜粋

『THE COMPLETE WORKS OF SWAMI VIVEKANANDA VOL V』 ADVAITA ASHRAM (1964)

シカゴの万国宗会議の翌年一八九四年には日清戦争が勃発し、一八九五年には日本の勝利に終わった。こうした結果をふまえての発言だったと考えられるが、アジアの小国でありながらも欧米列強の脅威から独立を守っている当時の日本を見て、インドが独立を果たすために必要なことを感じたのであろう。

ヴィヴェーカーナンダは西欧、特にアメリカ、イギリスで自らの教えを説いて回った。

そして一八九七年インドに戻ると、ラーマクリシュナ・ミッションを創設し、宗教改革



岡倉天心

天心は一八八九年に開校した東京美術学校（現在の東京芸術大学の前身）にて、自分の理想の美術教育を実現しようとする熱心に日本美術史を説き、九〇年には校長に就任、九三年には宮内省の後援を受けて中国を訪問し、各地の文化財、寺院、美術品などを調査している。しかし、天心の自由奔放な性格と独自の美術理念は、当時の学会には理解されなかった。結局天心は

明治維新後、廃藩置県により福井藩は消滅して石川屋は廃業、岡倉家は東京に移って「岡倉旅館」を開業した。一八八〇年に東京帝国大学文学部卒業後は、文部省勤務を経て、日本の伝統美術を調査研究していく。

この若き日の天心に大きな影響を与えた一人が、外国人教師のアーネスト・フェノロサである。フェノロサと天心は日本の古典美術に対して共通の高い評価と関心があり、彼ら二人は一八八六年から七年にかけて、アメリカ、ヨーロッパを約八カ月視察した。この旅で天心は日本美術の価値を再認識したという。

天心は一八八九年に開校した東京美術学校（現在の東京芸術大学の前身）にて、自分の理想の美術教育を実現しようとする熱心に日本美術史を説き、九〇年には校長に就任、九三年には宮内省の後援を受けて中国を訪問し、各地の文化財、寺院、美術品などを調査している。

岡倉天心のインド訪問

岡倉天心は一八六三年、福井藩士岡倉覚右衛門の息子として横浜に生まれた。当時の福井藩は江戸幕府より神奈川の警備を命じられていた。開国による海外貿易の重要性を知らされた福井藩は、横浜に貿易商店「石川屋」を開き、天心の父を赴任させた。天心は幼少のころから、さまざまな外国人の姿を見て育ち、英語にも親しんだ。カルカッタと横浜、この二つの外国に開かれた街で、自国と西洋の双方の文化的影響を受けて育ったという点で、後述するタゴールと天心には共通性がある。

運動と社会奉仕活動を推進した。ラーマクリシュナ・ミッションは、現在、インドで最も活動的な社会奉仕団として活動しているほか、世界にも支部があり、それぞれの活動を行っている。残念ながら、ヴィヴェーカーナンドは一九〇二年に三九歳の若さでこの世を去ったが、その死の約半年前、岡倉天心はヴィヴェーカーナンドに会うためインドを訪問する。この二人の出会いから波紋は広がって、本格的な日本とベンガルの交流が始まるのである。

一八九八年自らが開校に尽くした学校を追われ、弟子たちや同志と日本美術院を結成するが、経済的な問題などさまざまな困難に直面する。この時期に天心は突然インドへの旅に出かけたのだった。

岡倉天心はヴィヴェーカーナンダのことを新聞報道で知ったのかもしれない。あるいは当時日本美術院で天心の授業に参加していたジョセフ・マクラウドというスコットランド系のアメリカ人女性がいたが、彼女はヴィヴェーカーナンダの弟子でもあった。天心は彼女からヴィヴェーカーナンダの存在を知ったという説もある。

天心はヴィヴェーカーナンダを日本に招待しようと考え、ジョセフ・マクラウドを通じて、彼に日本への招待状と旅費として当時の金額で三〇〇ドルを送った。しかし、ヴィヴェーカーナンダは健康状態が思わしくないという理由でその招待を断った。天心自身がインドを訪問した理由はほかにもあったであろうが、そのうちの一つはヴィヴェーカーナンダに会いに行くためであったと思われる。

天心のインド訪問には、ジョセフ・マクラウドのほか、日本人の若い僧侶・堀至徳も同行した。一九〇一年の一月五日に日本を出発し、翌一九〇二年一月六日に彼らはカルカッタに到

着した。同日、ジョセフ・マクラウドは二人をカルカッタ郊外のベールールのラーマクリシュナ・ミッションに案内し、ヴィヴェーカーナンダに紹介した。ヴィヴェーカーナンダは彼らが訪れたことを大変喜び、「長い間会えなかった兄弟がやってきたようだ」とジョセフ・マクラウドに語ったという。

天心はこのときの感動を、僧侶の織田得能宛に書き送った手紙の中でこう記している。

「過般来当地に参りヴィヴェーカーナンダ師に面会致候。氏は気魄学識超然、拔群一代の名士と相見え、五天至る処節を敬慕せざるはなし」

「師はまた英語を能くし、泰西最近の学理にも通じ、東西を湊合して不二法門を説破す。議論風発、古大諭師の面目あり。実に得難き人物と存候。出来得べくんば小生帰朝の際同伴致すべき考へに候」

一月二日には、天心一行の歓迎会も開かれ、天心はヴィヴェーカーナンダの訪日を強く希望している。しかし残念なことに、このとき、すでにヴィヴェーカーナンダは健康を害しており、結局訪日はかなわなかった。なお、『スワームィー・ヴィヴェーカーナンダと日本』（日本ヴェーダーンタ協会）によれば、同じ時期、明治天皇がヴィヴェーカーナンダを日

本に招こうとされたという証言が記されている。明治天皇のヴィヴェーカーナンダ訪日招待と、天心が何らかの関わりをもっていた可能性もあるが明らかではない。

このヴィヴェーカーナンダを通じて、岡倉天心はインドにおいて影響力のあるタゴール家や、そのほかの著名な人々に出会うことができた。当時岡倉天心はすでにアジア主義者として、政治的には欧米諸国からのアジアの解放を目指しており、彼の行動は常にイギリス植民地当局の監視下にあった。だからこそ天心はこの時期の自分の行動や言説に対し、ほとんど書き残してはいない。当時関係したインドの民族独立運動についての情報が漏れるのを恐れたのだろう。

岡倉天心は、ヴィヴェーカーナンダと出会ったのち、タゴールの甥シュレンドロナト・タゴールの家で過ごし、仏教の聖地オジョンタ、イロラ、ブッダガヤなどを訪問するとともに、活動家たちの集まりにも参加した。シュレンドロナトは直接の活動家ではなかったが、独立派の支援者の一人だった。

岡倉天心は偉大な芸術家、思想家であるとともに、断固とした政治活動家の一面をもっていた。この時期インドで完成させ、ロンドンに送って出版したのが、天心の主要著作の一つであり、アジアの文化、宗教、思想、芸術のすばらしさを讃えた『東洋の理想』である。そして同時に、生前は出版されなかった激烈な政治文書『東洋の覚醒』を、このインドで彼は執筆した。思想、哲学、芸術、そして政治は、天心の中で矛盾するものではなく、深くつながったものとして考えられていた。

なお、『東洋の理想』、『東洋の覚醒』はそれぞれ英語で書かれており、のちに逆輸入されて日本語に翻訳されている。

ヴィヴェーカーナンダを深く尊敬していたイギリス人女性ニヴェディタ（本名・マーガレット・エリザベス・ノーブル）も天心に運動家たちを紹介した。また彼女は天心の英文にも協力し、『東洋の理想』出版時には序文を寄せている。

イギリス人といってもアイルランド人であり、また天心にヴィヴェーカーナンダを紹介したスコットランド民族の先祖をもつジョセフィン、さらに、タゴールの『ギータンジャリ』を偉大な文学として称賛したのも、アイルランド人作家のイエイツであった。彼はアイルランドのキリスト教伝来以前からの民族文化であるケルト文化の復興を目指していた。このようなイングランドの支配下にあった民族の人々が、天心とインド独立運動を

結びつけたことも、また興味深い。

アジアは一つ

岡倉天心の「アジアは一つ」という有名な言葉は、彼がインド滞在中に執筆した『東洋の理想』はじまりのひと言である。カルカッタに到着した一月は乾期で、日本人にとっても過ごしやすい時期だが、三月からは次第に温度が上昇し、湿度の高い、暑い夏になる。五月からは、湿度が高く暑いまま雨期となり、サイクロンをともなう大雨が降る。蚊も多く、日本人にとっては耐えがたい季節が続く。そして九月頃からやまと雨がやんで気温も下がり始め、次第に乾期に入る。

こうした気候のなかで、天心は彼の最初の著書である『東洋の理想』を執筆した。また同じくインド滞在中に書かれた『東洋の覚醒』は、天心の死後、草稿のまま発見された。未定稿であり原題もなかったため、原題は訳者によってつけられた。『東洋の理想』の異稿であった可能性もあるようだ。

二冊の著書には、日本を離れたインドの地で、世界やアジア、そして日本について天心が感じたことがまとめられている。

アジアは一つである。二つの強力な文明、孔子の共同主義をもつ中国人と、ヴェーダの個人主義をもつインド人とを、ヒマラヤ山脈がわけ隔てているというのも、両者それぞれの特色を強調しようがためにすぎない。雪を頂く障壁といえども、すべてのアジア民族にとっての共通の思想遺産ともいえるべき窮極的なもの、普遍的なものに対する広やかな愛情を、一瞬たりとも妨げることは出来ない。こうした愛情こそ、アジア民族をして世界の偉大な宗教の一切を生み出さしめたものであり、地中海とバルト海の海洋的民族が、ひたすら個別的なものに執着して、人生の目的ならぬ手段の探求にいそしむのとは、はつきり異なっている。

(中略) もし、アジアが一つであるならば、アジアの諸民族が単一の強力な網の目をなしていることもまた事実である。

(中略) アラブの騎士道、ペルシアの詩、中国の倫理、そしてインドの思想、これら

の一切が、単一のアジア的の平和を語っていて、そこにおのずと共通の生活が育ち、それぞれの場所で異なった特徴的な花を咲かせながらも、確たる区分線など引きよぎもないのである。イスラム文化自体、いわば騎馬にまたがり、剣を手にした儒教だと見なすことも出来る。

岡倉天心著・佐伯彰一訳『東洋の理想』平凡社

しかし同時に、天心はインドや中国においては、過去の偉大な文化的伝統が、すでにさまざまな戦乱や対外侵略によって破壊されたことに心を痛めた。だからこそ天心は、日本にこそ、アジアの文明の統一性が残されていると考えたのである。

しかし、こうした複雑の中の統一ともいうべきアジア的特性を一きわ明瞭に実現する作業こそ、日本の大いなる特権だったのだ。(中略) 途切れることなき主権という独特の恵み、他に征服されたことなき民族の誇り高い自恃の心、また膨張発達を犠牲にして、祖先伝来の思想、本能を護り育ててきた島国的な孤立などが相よって、日

本をアジアの思想と文化という信託の真の貯蔵庫たらしめた。王朝の顛覆、タタール族騎兵の侵入、猛り狂った暴民による殺戮、破壊などが、くり返し襲いかかった中国では、唐代皇帝の栄光も宋代社会のも、これを思い起こさせる道標というべきものは、文学作品と廃墟あるのみであった。

(中略) インド藝術の崇高な達成も、フン族の粗暴さ、回教徒の熱狂的な偶像破壊、金銭ずくのヨーロッパの意識せざる文物破壊によって、ほとんど跡方なくこぼち去られて、今は過去の栄光をしのばせるものとして、わずかにアジャンタのかびの生えた壁、エローラ(編集注・石窟寺院で有名)の痛められた彫像、岩に刻んだオリッサ(編集注・ベンガル湾に面した州)の無言の沈黙、さらには現在の日用家具があるばかりで、インド人の優雅な家庭生活の中で、美は悲しげに宗教にすがりついているように見える。

アジア文化の歴史的な富を、系統的にその秘蔵の実物を通して研究し得る場所は、日本をおいてないのである。帝室の御物、神社、発掘された古墳(ドムネ)などが漢代の技法の微妙な曲線の秘密を明かしてくれる。奈良の寺院は、唐代の文化の、また当時隆盛の

極みにあって、日本の古典期の創造に大いに影響をあたえたインド藝術の代表的作品に富んでいて、かくも目ざましい時代の宗教的儀式と哲学はいうまでもなく、その音楽、発声、儀礼、服装に至るまで手を付けずに保存してきた一国民にとって、当然の相続財産となっているのだ。

また、諸大名の所蔵品も、宋王朝、元王朝の美術品、写本を豊富にふくんでおり、中国自体においてさえ、前者はモンゴルの征服の間に失われてしまい、後者はまた明代の反動のうちに同じく消え去ったから、現代中国の学者の中には、こうした事実を元気づけられて、彼ら自身の古代の知識の源泉を日本に求めようと努める人さえ出てきた。

かくて、日本はアジア文明の博物館である。いや、たんに博物館には止まらない。というのは、日本民族の特異な天分は、古きを失うことなく、新しきものを歓迎し、あの手をゆるめず、その生ける不二ドクワンテイズム主義の精神によって、過去の理想のあらゆる局面を余さず維持しようと努める。神道は、仏教以前の祖先崇拜の儀式を今なお守りぬぎ、仏教徒自身も、その自然の順序に従って日本の国土を豊かにしてきた、宗教的発展のさまざま

な宗派のすべてに執着を示している。

岡倉天心著・佐伯彰一訳『東洋の理想』平凡社

これらの天心の言葉は単純な日本礼賛ではない。彼自身、明治時代の日本で、貴重な文化遺産が打ち捨てられたり、欧米崇拜のなか日本美術の伝統が軽視されることに怒りを覚えて、日本文化復興の運動をしてきた。彼はインドで、アジアの文明をもう一度復興させることを目指していたのだ。

特に天心が力を入れたことの 하나가、仏教復興運動だった。インド全体では、仏教は一二〜一三世紀にほぼ滅んでしまっているが、最後まで信仰が残ったのもベンガルだった。しかし天心の時代には、すでにブッタガヤの遺跡も荒廃してしまっていたため、天心はこの地に巡礼地を作ろうとして土地を求めるといった活動も行っている。

これにもタゴールは大変共感した。タゴールはヒンドゥー教から分かれたプランモ教だが、仏教にも深い関心と敬意を抱いており、天心と共に仏教遺跡を回っている（後期タゴールは、仏教に最も共感していたという説もある）。この仏教がアジアを結びつける一つの

柱であることも、『東洋の理想』では語られている。

天心がインドの民族運動家に与えた影響

インドの地ベンガルで、天心が民族運動家にどのような影響を与えたかは、次の印象的なエピソードが多くを語っている。天心は「君は自分の国のために、何をしようとしているのか」とシユレンドロナトたちに尋ねた。シユレンドロナトは、今のインドの情勢の厳しさ、運動の難しさを説明した上で「今は一人一人が地道な努力をして、その結果を時にゆだねるしかない」という意味のことを答えた。すると天心は、そのような答えを聞くことは寂しいことだと言ひ、ある恐ろしい話をして聞かせたのだった。それは、自分が幼児のころ、隣室で口論があるので隙間から覗いてみると、叔父が、首を斬られて頭のない胴体で座ったままでおり、その頸動脈から真つ赤な血がほとばしっていたのを見た、というものだった。

これは天心独特の、恐ろしいが大げさなたとえ話とすることもできる。しかし、同時にこの言葉は、現状が難しければ、たとえ過激な行動をとつても事態を動かすべきだ、という呼びかけと解釈することもできるだろうし、事実、運動家たちにはそのように伝わったのではないか。

実際のところ、この時期に秘密結社「オヌシロン・シヨミテイ」が作られている。この団体は、日本における頭山満の玄洋社の初期活動に近い民族主義運動だった。天心が同時代の頭山満や玄洋社のことを知らないはずはない。天心がインドで執筆した『東洋の覚醒』の以下の文章には、まさに民族独立運動の精神があふれている。彼はこれをインドの人々、そして植民地下にあるすべてのアジア人のために書いたのだ。

アジアの兄弟姉妹よ！

おびただしい苦痛が、われわれの父祖の地を蔽っている。東洋は柔弱の同義語となった。土着民とは奴隷の仇名である。われわれの温順にたいする讃辞は反語であつて、西洋人からすればその礼儀正しさは臆病のせいなのだ。商業の名においてわれわれは好戦の徒を歓迎している。文明の名において帝国主義者を抱擁している。キリスト教

の名において無慈悲のまえにひれ伏している。国際法の光は白き羊皮紙上に輝いている。だが、あますところなき不正の翳^{かげ}が有色の皮膚に暗く落ちている。

(中略) 勇気と洞察力ある少数者がいれば、不可能事を成し遂げるに足ることは驚くべきことである！ ドイツ帝国、アメリカ共和国、イタリア王国は、彼らの不屈の精神を意気銷沈した大衆の心に吹き込んだ一握りの人間の事業である。何百万人がたった一人の輝ける名前に導かれることに慣れている東洋では、一人の自己犠牲的な指導者が成し遂げうることは、西欧のいかなる国よりも量り知れないほど大きい。

(中略) われわれが欲するのは統一と指導力であって、数の優勢ではない。インドの土民兵の蜂起が失敗するのは、ひとえに彼らの嫉妬からする内紛によるのであって、英国兵の勇気のせいではない。義和団は、かりに清国政府軍が共同行動に加わることを許されさえしたら、成功しただろう。

アジアは山岳や河川に事欠かない。したがってゲリラ戦は外国軍の優勢という呪文を破り、かくして市民と兵士の目をさまして母国の救出に参加せしむることができる。ヨーロッパはわれわれを徹底的に畏服させるに足る大軍を送ることはけっしてできない。ヨーロッパがわれわれの国土を支配するのは、必然的に飼い馴らされた現地人の連帯の軍隊にたよらねばならない。だが現地人の軍隊とはわれわれのものではないのか。

岡倉天心著・桶谷秀昭訳『東洋の覚醒』平凡社

これらの言葉は、まさに頭山満から大川周明、そして大東亜会議の精神までを貫く、アジア解放の呼びかけにほかならない。そして、岡倉天心とラビンドロナート・タゴールとの出会いも、二人に深い感銘を与えあうものだった。岡倉天心がイギリス植民地当局の監視下に置かれていたことは先に述べたが、そのためか二人の政治的な会話は記録に残されていない。たとえ直接政治的なことを語らずとも、タゴールが親戚たちや運動家と同じ志を持っていることを岡倉は直ちに理解しただろう。「アジアは一つ」という岡倉天心の思想は、タゴールのなかに最大の理解者を見出したのである。第二章では、岡倉とタゴールそれぞれの著作を通じて、この二人がどれほど豊かな精神的交流を深めたかを明らかにしていきたい。